

一 次の文章を読んで、後の問い(問1～15)に答えよ。(配点 75)

## 積極的幸福と消極的幸福

〈幸福〉について考えてみましょう。

社会学者のジグムント・バウマンが2008年に記した『幸福論——“生きづらい”時代の社会学』(作品社)に、「一人当たりのGDPと国民の平均幸福度は、一定水準を超えると関係がなくなる」(高橋良輔・開内文乃訳)という記述があります。この一文は、ジギ通りの意味ばかりでなく、一人当たりのGDPが一定水準に達しなければやはり不幸である、という指摘でもあることも二重に興味深い考察です。

世帯年収と幸福度の相関関係を調べたさまざまな調査では、年収の高さと幸福度は比例します。ただし、年収が1000万円を超えるとそうではなく、というのがおおよそその結論です。以前、読売新聞が行った幸福度調査でも、「家族に満足していますか」という設問に対し、世帯年収が1000万円に向かって満足度は右肩上がりになるのですが、1000万円を超えると、逆に満足度が下がるという調査結果がありました。年収が多くて幸福な人ももちろんいるでしょうが、一定水準を超えると、年収の多さと満足度に相関関係は見られなくなる、というのがこれらの調査の結論です。

つまり、現代の幸福には二つのタイプがあることが推測できます。

一つは、能動的な幸福、すなわち積極的な多幸福感による幸せです。

もう一つは、苦痛や不幸、不快を前提とした幸福です。つまり、なにか不幸なことが起こると、「ああ、苦痛や不幸がない状態は幸福なんだ」と改めて感じるという、きわめて消極的な幸福感です。2011年の東日本大震災後の内閣府の調査でも、「震災後に絆が強まった」と回答した人ほど、幸福度が高くなっているというデータが見られました。不幸を逃れている、イコール幸福である、という認識です。

後者の消極的な幸福基準のみで測れば、日本の大多数の人々は幸福なはずです。しかし、現実はそのではありません。たとえば現在においても、国連による世界幸福度ランキングの日本の順位は62位(2020年)、コロナ禍以前でも日本の自殺者数は先進国の中で上位を占め続けてきました。このような「幸福感を得られない日本社会」の背景には、人間とは、自分の人生が肯定されたり承認されたりしないと幸福感を味わえない存在だという建前を超えた事実があります。つまり、前者の積極的な幸福が、人間の幸福感には必要なのです。

甲

近代社会は、承認や評価を自動的に得られない社会です。前近代社会は宗教やコミュニティがあつて、その中で日常の営みを続けていれば、承認や評価を得られる社会でした。しかしながら近代社会は、承認・評価を自らの手でつかみとらなければいけません。要するに、他人から必要とされる評価される状態を自分の手で作り出すのが、資本主義社会の特徴だといえるのです。

センジュツのバウマンは、「消費社会において、幸福を生み出すと期待される商品・サービスを**買**うことが、近代社会の幸福の基本になった」とも記しています。「これを買えば、幸福になりま

す」と壺つぼを売りつける商法も、こうした幸福システムにビンジョウビンジョウした売買です。私たちは人生において、「これを買うと幸福になれる」という消費の物語を求めているともいえるのです。

**C** 物語には段階があります。昭和の時代においては、「豊かな家庭生活を作ればハッピーになる」という筋書きの中にほとんどの人が存在してきました。つまり、豊かな生活が承認の源であり、家族の豊かさに必要なものを揃そろえていくのが幸せである、という物語です。これは近代社会の成長期に、あらゆる国の普遍的な物語になりました。日本に限らず欧米も東南アジア諸国もそれぞれ時期は異なりますが、「豊かな家族、豊かな家族生活を作りましょう」という志向が原動力となって、消費が拡大しました。

**D** この物語の良いところは、承認と評価が双方同時に得られるところです。つまり、夫婦、親子という小さな集団に家族を限ることで、お互いに必要かつ大切に思う存在が身近にすることに なります。家族全員の豊かさを目指して生活することで、お互いの評価も確認できるというシンプルなシステムであり、「中流家庭の幸福」の典型はここから生まれています。そして、その根底を支えていたのが、家族消費なのです。

### 家族消費のシステム

家族消費の特徴は、第一に、ほとんどの人がこの物語を共有でき、誰もが同一のものを目指せていたことです。

**E** 第二に、共同的消費という側面があります。

「一家に一台、テレビを買いましょう」

「家族で月に一度は外食をしましょう」

「家族で夏休みに旅行に行きましょう」

という、家族全員で一緒に使うものを買うという消費形態です。物やサービスを買うことで幸せに「なる」もしくは「なれる」システムが、社会的に共有されていたわけです。

**A**

この物語は **A** が可能でした。結婚、出産、子育て、子どもの進学・就職というように、二十年以上にわたる物語を得られました。高度経済成長期には、「このような生活が幸福な家族をもたらす」という物語とともに、新商品が次々と提示されてゆきます。最たるものはマイホームですが、新製品が生まれると、「家族がそれによって幸せになる」というイメージのテレビコマーシャルが大量につくられ、広く共有されました。

たとえば、日本にはコーヒーを家で飲むという習慣はもともたなかったのですが、1960年代にネスカフェのブランドを持つ飲料会社のネスレが、「家族団らんの場にコーヒー」という広告を流し、「幸せな家庭というものはどうもコーヒーを飲むらしい」というイメージを広めます。実際それで、インスタントコーヒーが日用品として定着していったのです。

**F**

遊園地も、その事例の一つです。社会学で谷津遊園（千葉県に昔あった遊園地）の分析をしている人がいますが、高度成長期には、全国各地に小さな遊園地が山のように生まれました。遊園地には観覧車があつて、小さなジェットコースターがあつて、飲食できる場所がある。つまり、家族と一緒に出掛けて、子どもとともに楽しめる、という消費活動です。現在では次々と閉園している状況ですが、かつては遊園地に年に数回行くことが幸せの形だ、という家族消費のパターンが確実に

存在したのです。

車も、小さい車から次第に大きい車へと買い替えていく。それが、家族が社会的に評価を得られるという満足度にもなりました。学歴も然り<sup>しか</sup>。親が子どもを自分より高い学歴にすると、社会的な評価を得られます。ですから、家族が一丸となって子どもの教育費に多額のお金をかけて、大卒の学歴を求めめるのです。

かつてこのような幸福システムが社会的に稼働していたのは、ほとんどの男女が結婚し、離婚が少なかったからでもあります。幸福である条件には、父親になる夫の収入の安定や上昇の期待が必要であることは否めません。私は一般の人々を対象に家族に関するインタビュー調査を長年にわたって続けていますが、中高年の女性で、「結婚して主婦になったときは社宅で何もなかったけれど、夫の給料が増えると、一個一個、家電製品が増え、その都度幸福を感じた」という話をよく聞きました。つまり、幸福をもたらす商品を次から次へと買い続けられるという期待や実感が、家族消費のシステムを支えていたわけです。

乙

しかし、1980年代後半から、「豊かな家族生活<sup>G</sup>」という物語が揺らぎ始めます。物語を完成してしまった人々、つまり豊かな高齢者や子育てにめどがついた共働きの家庭のように、家族を豊かにする商品を揃え終えた人たちが増える一方で、家族を豊かにする商品を揃え続けられない人々、つまり家族を作れない独身者や家族を捨ててしまう人が現れてきたのです。この格差拡大の両極にいる人は、じつは同じような行動をしています。

いわゆるこれが、「個人消費」というものです。家族が「家族のために」物を買うのではなく、個人が「個人のために」物を買うという時代の始まりです。

もちろん、家族消費の次元も存在し続けますが、もう一つ別の次元、個人の消費の顕在化は消費の多様性をカシカ<sup>d</sup>させました。承認や評価の単位が個人個人に分けられ個別化し、幸福の持続期間は必然的に短くなっていくのがその特徴です。

消費の個人化の中で最初に出てきたのはブランドでした。ブランド物というのは、「これを持っていると、みんなから評価されますよ」と一般的に認められた物です。80年代には、「ああ、初めてグッチのバッグを買えた。抱いて寝た」という女性が実際に存在しました。多くの若者がブランド品を買って、「これでやっと一人前の中流階級として認められる」という思考が生まれたのです。

男性の場合は時計や車です。マイカー消費にもブランド志向が高まり、「四畳半一間のアパートに住んで、車はBMW」という若者の存在が時代の象徴として報道されるようにもなりました。そこには、「車がないとデートに誘うのも恥ずかしい」という時代意識があり、女性の側にも「車も持っていない男とデートするなんて」という価値基準が背景にあったからです。男性は借金してでも車を買ったりして、女性から見<sup>H</sup>下されないように頑張っていました。

当時の広告は、この「ブランド商品を持てば、いかに幸福か。いかに地位が高いのか」という物語を継続的に宣伝していればよかったのですが、結局、このブランド消費は行き詰まります。ブランドに心を囚われている人は、車にしる、ブランドのバッグにしる、新しい商品を買いつけられないとわかった途端に購買をやめるのです。要するに、持続できない時点でやめざるを得なくなりま

すし、続けていけば自然に飽きるといふ心理面もあります。男性も女性も「ブランド消費は結婚するまで」とアンモクの裡うちに思っていた若者は多く、中年や高齢者になるにつれ、ブランド消費には興味が失うせていきます。そして、平成時代の到来となります。

### 家族と個人の限界の先に

<sup>1</sup>平成日本は、「消費不安時代」であったというのが私の考えです。

若年層は、そもそも結婚して自分が家庭を持てるかどうかが不安です。中年層やフユウソウfでさえも、今の生活を維持できるのか、家族の物語を継続できるのかという不安がシジュウsつきまとう。家族形成、維持でさえ不安なのに、新たなブランド消費になど手が回りません。家族消費も個人消費も、限界に達したのです。

原因は、いうまでもなく収入の不安定性です。

収入が将来にわたって低下していく社会では、幸福を生み出すような消費をし続けることができ  
ません。 イ という消極的幸福を優先させますから、積極的幸福にはなかなか

踏み出せないのです。

山田昌弘「新型格差社会」(朝日新聞出版 2021年)

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～g のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は 1 ～ 7 。

a	ジギ	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">1</span>
b	センジュツ	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">2</span>
c	ビンジョウ	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">3</span>
d	カシカ	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">4</span>
e	アンモク	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">5</span>
f	フユウソウ	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">6</span>
g	シジュウ	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">7</span>

問2 空欄

ア

一つ選べ。解答番号は

8

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから

- ① 主観的な判断
- ② 悲観的な解釈
- ③ 排他的な実践
- ④ 画一的な構想
- ⑤ 伝統的な回想
- ⑥ 長期的な継続
- ⑦ 楽観的な宣伝
- ⑧ 客観的な演出

問3 空欄

イ

一つ選べ。解答番号は

9

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから

- ① 断捨離を実践したい
- ② 家庭円満に専心する
- ③ 家族の物語を続ける
- ④ ブランド消費の断念
- ⑤ 絆だけは残しておく
- ⑥ 自然災害からの復興
- ⑦ 感染だけは回避する
- ⑧ 貧困に陥らないため

問4 傍線部A「能動的な幸福」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① なにか幸せなことが起こると、「幸せとはこのようなことなのだ」と実感できるといふ、積極的な多幸感による幸せ。
- ② 国連による世界幸福度ランキングで上位に入り、自殺者数も少ない国に住むことにより得られる幸せ。
- ③ 年収水準が増加していくのに伴い、それと比例的に増加していくことを実感できる積極的な多幸感。
- ④ 他者から受ける評価や承認に頼るのではなく、自らの人生を主体的に承認・評価することにより抱くことができる多幸感。
- ⑤ 自分の人生に対する肯定や承認を、他者から得ることができることにより味わうことが可能となる幸福感。
- ⑥ 単に自分が幸せであることに満足するのではなく、他者をも幸せにすることを志向する前向きな幸福感。

問5 傍線部B「承認や評価を自動的に得られない社会」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 他人から必要であると承認され評価される商品・サービスを、自らの手で生産しなければならぬ社会。
- ② 他人から必要であると承認され評価される宗教やコミュニティを、自ら探し出していく必要がある社会。
- ③ 他人から必要であると承認され評価される状態を、日常の営みで得るのが難しいため自らの手で求めていかねばならない社会。
- ④ 他人から必要であると承認され評価される状態を、宗教やコミュニティを自ら再興することにより作り出す必要がある社会。
- ⑤ 他人から必要であると承認され評価される幸福システムが、日常的な営みの中に組み込まれている社会。
- ⑥ 他人から必要であると承認され評価される幸福システムを、資本主義社会の特徴として尊重する必要がある社会。



問6 傍線部C「物語には段階があります」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 「これを買うと幸福になれる」という消費の物語は、若年期、中年期、老年期というように人間の成長段階に応じて変わっていくということ。
- ② 「これを買うと幸福になれる」という消費の物語は、欧米諸国、日本、東南アジア諸国など国の発展段階により異なっているということ。
- ③ 「これを買うと幸福になれる」という消費の物語は、下流家庭、中流家庭、上流家庭と家庭の所得水準が上がるにつれて変化すること。
- ④ 「これを買うと幸福になれる」という消費の物語は、家族の豊かさが段階的に上がるにつれて変容すること。
- ⑤ 「これを買うと幸福になれる」という消費の物語は、昭和、平成というように時代の経過とともに常に揺らいでいたということ。
- ⑥ 「これを買うと幸福になれる」という消費の物語は、高度経済成長期、1980年代後半、平成時代というように時代の経過につれて様相が変わっていったということ。

問7 傍線部D「消費が拡大しました」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 家族全員が豊かな生活を送るために必要なものを揃えていくことになったから。
- ② 豊かな家族を作るためには家族の構成員を増やすべく多産が必要であったから。
- ③ 豊かな家族生活を送るのに必要な世帯年収が右肩上がりが増えていったから。
- ④ 豊かな家族生活を送るためにはお互いに承認・評価する習慣が必要だったから。
- ⑤ 中流家庭の幸福を支える商品・サービスを家族で互いに競い合って求めたから。
- ⑥ 豊かな生活を承認する源となる商品・サービスを盛んに海外から輸入したから。

問8 傍線部E「共同的消費」にあてはまらないものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 家族でドライブするための車を一台購入する
- ② 家族全員が同じ機種スマートフォンを持つ
- ③ 家族で一日中東京デイズニールランドで過ごす
- ④ 家族が揃って年の瀬に居酒屋で忘年会を開く
- ⑤ 家族で電車に乗って江ノ島まで海水浴に行く
- ⑥ 家族揃って喫茶店でコーヒーを飲み談笑する

問9 傍線部F「その事例」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

解答番号は 15。

- ① 家族みんながお揃いのものを買うことにより幸福になる場所
- ② 次々と提示される新商品を家族全員が満喫可能であった時代
- ③ 家族みんなが朝から晩まで楽しむことのできるテーマパーク
- ④ 家族みんなで団らんを楽しむことができる日常品の消費の場
- ⑤ 高度成長期に誕生し現在は次々と閉園しているテーマパーク
- ⑥ 家族が共同で使用することにより幸せを実感できるシステム

問10 傍線部G「『豊かな家族生活』という物語が揺らぎ始めます」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 豊かな高齢者や子育てを終えた共働きが増えたことにより高額な家族消費を行う家庭が増加した一方で、独身が続ける者や家族を捨てる者が増えていき、両者の消費格差が拡大していったということ。
- ② 家族を豊かにする商品を揃え終えた人たちが増える一方で、家族を豊かにする商品を揃え続けられない人々が現れてきた結果、家族が自分のために物を買う家族消費のシステムがうまく働かなくなり始めたということ。
- ③ 新商品が次々と提示されていくと同時にそれによって家族が幸せになっていくという幸福システムが、独身が続ける人たちや離婚する人たちの増加による所得格差の拡大により、機能しなくなり始めたということ。
- ④ 結婚しない者や離婚する者が出てくるとともに、幸福をもたらす商品を買いきつくしなかった家庭が増えてきた結果、家族が幸せになるシステムが社会的に稼働しにくくなっていったということ。
- ⑤ 高度経済成長の時代が終わったことにより父親になる夫の収入の安定や上昇の期待が望めなくなった結果、幸福をもたらす商品を次から次へと買い続けられるという期待や実感が得られなくなったということ。
- ⑥ 豊かな高齢者や子育てにめどがついた共働き家庭の間で消費の個人化が進む一方で、独身が続ける者や家族を捨てる者は十分な所得がないまま個人消費を減らしていくことになり、家族を豊かにする幸福システムが行き詰まり出したということ。



問11 傍線部H「見下さ」の終止形である「見下す」ことから意味の最も遠いものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は **17**。

- ① 軽蔑                      ② 卑見                      ③ 侮蔑                      ④ 軽視                      ⑤ 蔑視  
⑥ 軽侮                      ⑦ 愚弄                      ⑧ 侮辱                      ⑨ 嘲笑

問12 傍線部I「平成日本は、『消費不安時代』であった」の説明として最も適切なものを、次の

①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **18**。

- ① 平成日本は収入が将来にわたって低下していく社会となつてしまい、個人消費の維持が優先される中、幸福な家族の物語を継続できる家族消費が維持できなくなったということ。  
② 平成日本は収入の不安定性が原因となつて幸福を生み出す消費を継続できなくなり、中高年や高齢者になつても継続していたブランド消費に手が回らなくなったということ。  
③ 平成日本は結婚することや現在の生活を維持することに対する不安が高まり、ブランド消費を支えていた家族消費も個人消費も限界に達したということ。  
④ 平成日本は現在の生活の維持や家族の物語の継続に対する不安につきまとわれることが原因となり、将来にわたり収入が低下していく社会になつたということ。  
⑤ 平成日本は将来にわたり安定的に収入を確保できる社会ではなくなつてしまい、家族消費のみならず個人消費も幸福を生み出す消費として続けることができなくなったということ。  
⑥ 平成日本は収入が将来にわたり低下していく社会となつたことにより、それまで揺らぐことのなかつた家族消費だけでなく個人消費までもが限界に達することになつたということ。

問13 空欄

甲

から一つ選べ。解答番号は 19 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① 家族消費に見る長短所
- ② 豊かな生活への筋骨き
- ③ 資本主義社会の長短所
- ④ 承認のための消費物語
- ⑤ 消費拡大を支える集団
- ⑥ 中流家庭の幸福と不幸
- ⑦ 他人に評価される状態
- ⑧ 近代社会の幸福の段階

問14 空欄

乙

から一つ選べ。解答番号は 20 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① 昭和時代の消費
- ② 幸福の持続期間
- ③ 豊かな家族生活
- ④ 消費格差の拡大
- ⑤ ブランドの消費
- ⑥ 平成時代の到来
- ⑦ 個人消費の台頭
- ⑧ 中流階級の承認

問15

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は 21 ・ 22 。

- ① 日本にはコーヒーを家で飲むという習慣は元来なかったが、1960年代にネスレが「家族団らんの場にコーヒー」という広告を流し、幸せな家庭ではコーヒーを飲むらしいというイメージを広めた結果、インスタントコーヒーが日用品として家庭や職場で定着した。
- ② 1980年代には多くの若者がブランド品を購入することにより「一人前の中流階級として認められる」という思考が生まれたが、ブランド品の購入はそれを持続できないとわかった時点でやめざるを得なくなり、家族消費は行き詰まることとなった。
- ③ 読売新聞が実施した幸福度調査では世帯年収が1000万円を超えると満足度が下がるという結果が出たが、それと同様に社会学者バウマンも一人当たりのGDPが一定水準を超えると国民の平均幸福度は低下することを指摘した。
- ④ 幸福である条件として父親になる夫の収入の安定や上昇の期待が必要であるが、少子高齢化の進展により家族を作れない独身者や豊かな高齢者が増えてしまった結果、1980年代後半から消費格差が拡大することとなった。
- ⑤ 親が子どもの学歴を自分よりも高くするために教育に多額のお金をかけ自分の子どもを大卒に入れて卒業させることは、小さな車から大きな車へと車を買っていくのと同じように家族が社会的な評価を得られるという満足度にもなった。
- ⑥ 東日本大震災後に内閣府が行った調査では「震災後に絆が強まった」と回答した人ほど幸福度が高くなっているというデータが見られたが、日本の自殺者数は現在まで増加しており、不幸を逃れていることだけをもって幸福と感じる人は少ないことを示している。
- ⑦ 社会学者バウマンは幸福を生み出すと期待される商品・サービスの購入が近代社会の幸福の基本になったという主旨の指摘をしているが、「これを買うと幸福になれる」という消費の物語には承認と評価が双方同時に得られるという長所がある。
- ⑧ 高度経済成長期には新商品が次々と提示され、家族がそれによって幸せになるという宣伝が盛んに行われたが、1980年代に入るとこの家族消費のシステムは完全に稼働しなくなり、ブランド消費に見られるような消費の個人化が進むこととなった。
- ⑨ 高度成長期には、全国各地に多数の小さな遊園地が誕生し、家族で一緒に出掛けて子どもとともに楽しむという家族消費のパターンが確実に存在したが、個人消費の顕在化により消費の多様性が失われた結果、現在ではこれらの遊園地は次々と閉園している。

## 甲

近代科学は、十二世紀ルネサンスを通じて、ギリシア科学の論証精神とアラビア科学の実験精神とが結びついたところに成立した。これは、演繹法えんえきに基づく論証科学と帰納法に基づく実験科学、あるいは合理的方法と経験的方法との結合と言い換えることもできる。近代科学の方法論はこの両者が統合されることよって確立された。すなわち「仮説演繹法 (hypothetico-deductive method)」と呼ばれる方法である。これは、まず未知の自然現象を説明する仮説を立て、その仮説から観察可能な帰結を導き出し、その帰結を実験的に検証する、という一連の手続きから成り立っている。たとえば、ガリレオは斜面の実験を繰り返しながら「落体の法則」を発見する過程で、このような方法を自覚的かどうかはともかく、すでに用いていたと考えてよい。

近代科学は、まさに自然界の秩序を探究するこのような「方法的態度」によって特徴づけられる。「方法 (method)」という言葉はもとギリシア語の「メトドス (methodos)」に由来する。これは「～に沿って」という意味の「メタ (meta)」と、「道」という意味の「ホドス (hodos)」とからなる言葉であり、したがって方法とは「道に沿って」進むことにほかならない。

ギリシア時代にすでに学問の方法に関してさまざまな考察が重ねられてきたが、それらをシユウタイセイシしたものは、アリストテレスの「オルガノン (思考の道具)」と呼ばれる一連の論理学的著作であった。具体的には『カテゴリー論』、『命題論』、『分析論前書』、『分析論後書』、『トピカ』および『詭弁論駁論』きべんの六つの著作群を指す。

学問の方法論とは、問題となつていふ事柄について筋道を立てて思考し、導かれた結論の正しさを誰もが認めざるをえない形で論証する手続きのことである。では、「論証」とはいかなるものか。簡単に言えば、前提となる一群の命題から一定のルール (推論規則) に従つて結論となる単一の命題を導き出すことである。われわれの知識は「文 (sentence)」の形で言語的に表現され、そのうちの真偽が明確に定まる有意義な文を「命題 (proposition)」と呼ぶ。したがって、論証の前提や結論を構成するのは命題である。一般に真なる命題から真なる結論を導く論証は妥当 (健全) であり、逆に真なる命題から偽なる結論を導く論証は妥当ではない (不健全である)。そして、この妥当な論証の構造を明らかにするのが論理学の役割である。アリストテレスは論理学を体系化した最初の哲学者であった。彼は『分析論前書』において演繹的論証 (三段論法の理論) の構造を明らかにした。その体系は「伝統的論理学」と呼ばれている。また彼は『分析論後書』において、帰納的論証を中心とした科学の方法論の定式化を行ったのである。

ここで近代科学の方法論としての仮説演繹法Bの内容に立ち入る前に、演繹法と帰納法のそれぞれ長所と短所について考察しておこう。演繹法 (deduction) とは、普遍的命題 (前提) から個別の命題 (結論) を論理的に導き出す方法である。その典型は数学における論証、とりわけ幾何学的証明 (たとえば、ユークリッドの『原論』) の中に見ることができ。つまり、一群の公理 (前提、普遍的命題) から一つ一つステップを踏んで個々の定理 (結論、個別的命題) を導き出すという手続きが演繹法にほかならない。演繹法の特徴は、前提 (公理) が結論 (定理) を必然的に (例外なく) 帰結することにある。それゆえ、前提が正しければ、結論は必ず正しい。しかし、結論は前提

のうちにすでに暗示的に含まれていたものを明示的に取り出したものにすぎず、演繹法によって知識を拡張すること、すなわち新しい知識を獲得することはできない。

このような演繹法に対して、アリストテレスは他方の帰納法を「帰納は個々のものどもから一般的なものへの上昇の道である」(『トピカ』)と定式化している。つまり、帰納法(induction)とは個別的命題(前提)から普遍的命題(結論)を導き出す論証のことである。演繹法とは反対に、帰納法は知識を拡張することはできるが、前提と結論との関係は必然的ではなく、蓋然的(確率的)なものにとどまる。この点を一つの事例で考えてみよう。

たとえば「カラスAは黒い」「カラスBは黒い」……「カラスZは黒い」という ア を導き出す帰納的論証を取り上げよう。この結論「すべてのカラスは黒い」は全称命題(「すべてのSはPである」という形の命題)であり、そこには過去・現在・未来のあらゆるカラス(無限個)が含まれている。すると、前提となる観察事実は有限個であるのに対し、結論として導き出された普遍的法則は無限個のカラスに言及しているのであるから、前提と結論の間には有限から無限への推論という「 I 」が存在することになる。つまり、この論証は将来においてどこかで「白いカラス」が発見される可能性を完全に排除することはできない。それゆえ帰納的論証の結論は必然的ではなく、一定の確率でその法則が成立するという蓋然的な主張にとどまるのである。

このことを捉えて、帰納法が妥当な論証ではないことを指摘したのは、イギリスの哲学者D・ヒュームであった。彼は「Aが起こればBが起る」という帰納法に基づく因果的知識には正当な根拠はなく、原因と結果の結びつきは両者の「空間的近接」、「時間的継起」および「コウジョウテキ」に基づいて形成されたわれわれの「心の習慣」にすぎないものと考えた。科学理論を構築する基盤である帰納法が蓋然的結論しかもたらさないということから、ヒュームは科学知識の確実性を疑い、最終的には懐疑論に達したのである。

しかし、科学研究の現場では帰納法なしで済ますわけにはいかないし、また科学が経験科学である限り、数学や論理学など形式科学のように、演繹的論証のみに頼ることはできない。したがって、D 帰納法が演繹法と同じ程度の確実性をもちえないとしても、少なくとも十分信頼するに足る科学の方法であることを哲学者たちは示そうと試みてきた。その代表者がJ・S・ミルである。彼は帰納法を支える原理または公理として「自然の経路の斉一性(the uniformity of the course of nature)」を提唱した。これは、「ひとたび生じたことは、十分に類似した状況のもとでは再び生じ、再びどこか同じ状況が繰り返されるたびごとに生じるであろう」ということを意味する。つまり、自然界を観察して同じような状況のもとで一定の現象が生じれば、それ以後も将来にわたって何度も繰り返されると考えてよい、という原理である。この原理に基づけば、自然は統一ある秩序によって支配されているのだから、帰納法は十分に信頼できる妥当な結論を導く、という保証が与えられることになる。

しかし、この「自然の斉一性」がア・プリオリ(経験に先立つ)な原理だとすれば、それは経験科学の方法とは言えず、一種の形而上学的原理となるほかはない。他方、もし経験的原理だとすれば、その正しさは帰納法によって論証されねばならず、「帰納法の妥当性を保証する自然の斉一性の正しさを論証するために帰納法を必要とする」こととなって II に陥る。このようにして、論証方法としての帰納法の正しさを根拠づけることは、「帰納法の正当化」の問題として多く



の哲学者が挑戦してきたが、残念ながらいずれも成功はしなかった。そこから、K・ポパーのように、帰納法はそもそも論理的正当性をもたない推論方法であり、科学にとっては無用のチヨウブツにすぎないと主張する哲学者も出てきたのである。

### 近代科学の方法——仮説演繹法

すでに見たように、演繹法と帰納法は、それぞれの長所と短所をもっている。両者の長所を生かして、短所を補おうとするのが仮説演繹法にほかならない。これを明確な形で方法論として定式化したのは十九世紀の科学哲学者たちであったが、それ以前にも、その萌芽的形態はすでに自覚されていた。たとえば、F・ベーコンは『ノヴム・オルガヌム』（一六二〇年）の中で、近代科学の方法を「経験的能力と合理的能力との真実の正当の結婚」として特徴づけ、その結婚の内実を「蟻と蜘蛛と蜜蜂」の比喩に託して以下のように語っている。

学を扱ってきた人々は、経験派の人か合理派の人かの何れかであった。Ⅲ は蟻のリウギでただⅣ は使用する。Ⅴ は蜘蛛のやり方で、自らのうちから出して網を作る。しかるに蜜蜂のやり方はⅥ で、庭や野の花から材料を吸い集めるが、それを自分の力で変形し、消化する。

つまり、蟻とは経験的データを収集して結論を導く帰納法の、蜘蛛とは公理から合理的推論のみによって結論を紡ぎ出す演繹法の比喩である。それに対して、蜜蜂はさまざまな材料を集めてきては自分の中で変形し消化する。これは帰納法と演繹法を組み合わせた仮説演繹法の比喩と見ることができる。

しかし、仮説演繹法に関してはベーコンよりも前に、さらなるセンクシャが存在していた。「分解と合成の方法」を提唱した十三世紀の哲学者R・グロステストである。「分解 (Resolutio)」とは、現象をその構成要素にまで分析してそこから一般原理を発見する過程であり、明らかに帰納法に相当する。「合成 (compositio)」とは、見出された一般原理を組み合わせることでその現象を演繹的に再構成する手続きであり、これは演繹法に当たる過程であろう。そして、彼はその過程で導出された命題は経験的にテストされなければならないと主張した。その意味でグロステストの方法論は、十九世紀に定式化される仮説演繹法の原型であったと見ることができる。

十九世紀になると、ジョン・ハーシェルが『自然哲学研究に関する予備的考察』（一八三〇年）において仮説演繹法を明確な形で定式化するにいたる。彼の言葉を借りれば、「科学的探究が成功を収める過程では、帰納的方法と演繹的方法の双方を交互に使用することが絶えず求められている」のである。その後、W・ヒューエルやW・ジェヴォンズらによってさらに洗練された仮説演繹法は、今日では以下のようなステップを踏むものと考えられている。

- (1) 観察に基づいた問題の発見
- (2) 

イ
---
- (3) 仮説からのテスト命題（予測）の演繹



- (4) テスト命題の実験的検証または反証  
 (5) テストの結果に基づく仮説のジユヨウ<sup>f</sup>、修正または放棄

明らかに、(1) から (2) へいたる過程では帰納法が、(2) から (3) へいたる過程では演繹法が用いられている。このようにして仮説演繹法は帰納法と演繹法とを組み合わせて両者の欠陥を補い、さらに演繹のもつ比重を高めることによって、帰納法のもつ不確実さをある程度までホセイ<sup>g</sup>することができた。しかし、仮説演繹法といえども有限回のテストを通じて仮説を確立する方法である限り、そこで得られた一般法則は、やはり蓋然性を免れるわけにはいかない。それは、一定の確率で法則が成り立つことを保証するにとどまるのである。

だが考えてみれば、自然科学が経験科学である以上、それが常に「新しい経験」に対して開かれているのは当然のことである。仮説は、たとえそれが実験的に検証されたとしても、修正を免れた絶対的真理の資格を獲得するわけではない。予測のつかない新たな経験によって仮説が反証される可能性は常に残っているのである。それゆえ、自然科学の法則に数学や論理学と同等の論理的必然性を求めることは無いものねだりと言わねばならない。その意味で、科学理論や科学法則は永遠に「仮説」の身分にとどまるのであり、それは常に経験的テストによる修正や廃棄の可能性に身をさらしているのである。

野家啓一「科学哲学への招待」(筑摩書房 2015年)

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～g のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきり

した楷書体で書くこと。解答番号は 23 ～ 29 。

- |   |         |  |  |
|---|---------|--|--|
| a | シュウタイセイ | <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">23</span> |  |
| b | コウジヨウテキ | <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">24</span> |  |
| c | チヨウブツ   | <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">25</span> |  |
| d | リュウギ    | <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">26</span> |  |
| e | センクシャ   | <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">27</span> |  |
| f | ジユヨウ    | <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">28</span> |  |
| g | ホセイ     | <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">29</span> |  |

問2 空欄 I に入る語として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 30。

- ① 帰納的飛躍
- ② 逆説的説明
- ③ 逆説的虚偽
- ④ 帰納的無限
- ⑤ 演繹的飛躍
- ⑥ 仮説的説明
- ⑦ 論証的虚偽
- ⑧ 演繹的無限

問3 空欄 II に入る語として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① 懐疑論
- ② 理想論
- ③ 背理法
- ④ 循環論法
- ⑤ 弁証論
- ⑥ 水掛論
- ⑦ 二進法
- ⑧ 三段論法

問4 空欄 III ～ VI に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- |   |         |        |       |       |
|---|---------|--------|-------|-------|
| ① | III—合理派 | IV—捨てて | V—経験派 | VI—強引 |
| ② | III—合理派 | IV—集めて | V—折衷派 | VI—極端 |
| ③ | III—合理派 | IV—作って | V—折衷派 | VI—中間 |
| ④ | III—折衷派 | IV—捨てて | V—合理派 | VI—中間 |
| ⑤ | III—折衷派 | IV—集めて | V—経験派 | VI—極端 |
| ⑥ | III—折衷派 | IV—作って | V—経験派 | VI—強引 |
| ⑦ | III—経験派 | IV—捨てて | V—折衷派 | VI—極端 |
| ⑧ | III—経験派 | IV—集めて | V—合理派 | VI—中間 |
| ⑨ | III—経験派 | IV—作って | V—合理派 | VI—強引 |

問5 空欄 ア に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 有限個の観察事実（前提）から、「カラスA～Zは黒い」という絶対的な法則（結論）
- ② 無限個の観察事実（前提）から、「カラスA～Zは黒い」という絶対的な法則（結論）
- ③ 有限個の観察事実（前提）から、「すべてのカラスは黒い」という普遍的法則（結論）
- ④ 無限個の観察事実（前提）から、「すべてのカラスは黒い」という普遍的法則（結論）
- ⑤ 有限個の観察事実（前提）から、「あるカラスは黒くない」という相対的法則（結論）
- ⑥ 無限個の観察事実（前提）から、「あるカラスは黒くない」という相対的法則（結論）
- ⑦ 有限個の観察事実（前提）から、「このカラスは黒くない」という個別的法則（結論）
- ⑧ 無限個の観察事実（前提）から、「このカラスは黒くない」という個別的法則（結論）

問6

空欄

イ

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから

一つ選べ。解答番号は

34

。

- ① 観察に基づいた問題の解決
- ② 問題を解決する仮説の提起
- ③ 問題に拘こだまらない自由な発想
- ④ 問題を検証する命題の提起
- ⑤ 仮説的命題の演繹法的提起
- ⑥ 仮説的命題の演繹法的解決
- ⑦ 仮説演繹法への移行の努力
- ⑧ 仮説演繹法からの移行過程

問7

傍線部A「命題」に該当しないものを、次の①～⑨のうちからすべて選べ。ただし、命題に該当しないものをすべて選ばなかった場合は点を与えない。また、命題に該当するものを選んだ場合も点を与えない。解答番号は

35

。

- ① 一に一を加えれば、その解は二である。
- ② 一から一を引くと、その解は二である。
- ③ これまで発見されたカラスはすべて鳥類に分類される。
- ④ これまで発見されたすべての蜘蛛は昆虫に分類されない。
- ⑤ 魚類であれば、すべて海中を泳ぐ。
- ⑥ ポパーの主張の真偽を判定せよ。
- ⑦ アリストテレスは哲学者である。
- ⑧ 哲学者でなければ、人間ではない。
- ⑨ 仮説演繹法の考え方は難解ですか。

問8 傍線部B「仮説演繹法」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

解答番号は 36。

- ① 既知の自然現象を反証するためにまず仮説を立て、その仮説から観察可能な帰結を導出し、  
たうえで、その帰結の真偽を実験的に確認する、という一連の手続きのこと。
- ② 既知の自然現象を反証するためにまず仮説を立て、その仮説から観察可能な帰結を導出し、  
たうえで、その帰結を実験的に検証する、という一連の手続きのこと。
- ③ 既知の自然現象を立証するためにまず仮説を立て、その仮説から観察可能な帰結を導出し、  
たうえで、その帰結を実験的に検証する、という一連の手続きのこと。
- ④ 未知の自然現象を説明するためにまず仮説を立て、その仮説から観察可能な帰結を導出し、  
たうえで、その帰結の真偽を実験的に検証する、という一連の手続きのこと。
- ⑤ 未知の自然現象を説明するためにまず仮説を立て、その仮説から観察可能な帰結を導出し、  
たうえで、その帰結が偽であることを実験的に検証する、という一連の手続きのこと。
- ⑥ 未知の自然現象を反証するためにまず仮説を立て、その仮説から観察可能な帰結を導出し、  
たうえで、その帰結の真偽を実験的に確認する、という一連の手続きのこと。

問9 傍線部C「蓋然的」の意味として最も適当なものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解

答番号は 37。

- ① 絶対にそうならないさま
- ② 蓋をされて不完全なさま
- ③ 完全に間違っているさま
- ④ 予想の範囲内であるさま
- ⑤ 予想の範囲外であるさま
- ⑥ ある程度確実らしいさま
- ⑦ 単に偶然的でしかないさま
- ⑧ 閉鎖空間から脱出する強い意志
- ⑨ 閉鎖空間から脱出できない諦め

問10 傍線部D「帰納法が演繹法と同じ程度の確実性をもちえない」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 38。

- ① 演繹的論証のみに頼る数学や論理学などの形式科学と異なり、帰納法が経験科学に依拠している以上、最終的に懐疑論に陥ってしまうから。
- ② 演繹的論証のみに頼る数学や論理学などの形式科学と異なり、帰納法が「自然の斉一性」に依拠している限り、懐疑論に陥ってしまうから。
- ③ 個別的命題から普遍的命題を結論として必然的に導き出す演繹法と異なり、帰納法は普遍的で無限個の観察事実を前提として結論を導き出すから。
- ④ 普遍的命題から個別的命題を結論として必然的に導き出す演繹法と異なり、帰納法は個別的で有限個の観察事実を前提として結論を導き出すから。
- ⑤ 帰納法によって成り立っている自然科学の法則に演繹法を基盤とする数学や論理学と同等の論理的必然性を求めることは、無いものねだりと言わねばならないから。
- ⑥ 帰納法はそもそも論理的正当性をもたない推論方法である、と主張したK・ポパーを含め、多くの哲学者が「帰納法の正当化」の問題に挑戦してきたが、誰も成功しなかったから。

問11 傍線部E「演繹法と帰納法は、それぞれの長所と短所をもっている」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 39。

- ① 演繹法は前提から結論を例外なく導出できるが、それだけで自然科学の基盤的方法たりえない一方で、帰納法は自然科学の基盤的方法たりえるが、前提から結論を例外なく導出することはできない。
- ② 演繹法はそれだけでは自然科学の基盤的方法たりえないが、前提から結論を例外なく導出することはできる一方で、帰納法は前提から結論を例外なく導出できないが、それだけで自然科学の基盤的方法たりえる。
- ③ 演繹法は知識を拡張することはできるが、前提と結論は必然的關係にはなりえない一方で、帰納法は前提から結論を必然的に導出できるが、帰納法によって新しい知識を獲得することはできない。
- ④ 演繹法は前提から結論を必然的に導出できるが、演繹法によって新しい知識を獲得することはできない一方で、帰納法は知識を拡張することはできるが、前提と結論は必然的關係にはなりえない。
- ⑤ 演繹法は数学的論証の典型となりうるが、結論として前提のうちすでに暗示的に含まれていたものしか取り出すことができない一方で、帰納法も数学的論証の典型となりうるが、結論として前提のうちすでに暗示的に含まれていないものまで取り出すことができる。
- ⑥ 演繹法は数学的論証の典型となりうるが、結論として前提のうちすでに明示的に含まれていないものまで取り出すことができるが、結論として前提のうちすでに明示的に含まれていないものまで取り出すことができる。

問12 空欄

甲

に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑨のうち

から一つ選べ。解答番号は 40 。

- ① 帰納法の正当化の失敗
- ② D・ヒュームの懐疑論
- ③ アリストテレスの論理学
- ④ K・ポパーの帰納法無用論
- ⑤ 学問の方法——演繹法と帰納法
- ⑥ ユークリッドの幾何学的証明の構造
- ⑦ 仮説演繹法——論証科学と実験科学の結合
- ⑧ 「すべてのカラスは黒い」——論理学と科学の出会い
- ⑨ ギリシア科学の論証精神とアラビア科学の実験精神との結合



問13

本文の内容に合致するものを、次の①～⑧のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

41

42

- ① 科学研究の現場において帰納法を完全に無視できないことを痛感していた科学者たちは、帰納法的な論証の短所を改善しようとしたものの、演繹法の長所に固執したために、仮説演繹法に基づく科学理論を提唱するには至らなかった。
- ② 仮説演繹法は十九世紀になってジョン・ハーシェルにより明確に定式化されることになるが、その原型は「分解と合成の方法」を提唱したR・グロステストや「蟻と蜘蛛と蜜蜂」の比喩で知られるF・ベーコン、さらにはアリストテレスにまで遡ることができる。
- ③ 懐疑論の観点からD・ヒュームが原因と結果の結びつきをわれわれの「心の習慣」にすぎないものと考えつつ、帰納法は妥当な論証ではないと主張したのに対して、J・S・ミルは「自然の斉一性」という原理を持ち出すことにより、帰納法的論証の正当化に成功した。
- ④ 近代科学の特徴は「〜に沿って」を意味するギリシア語の「メタ」と「道」を意味する「ホドス」という言葉に由来する「方法的態度」に存するが、方法的でない学問が存在しない以上、研究者は「演繹法」と「帰納法」のメリットとデメリットをもっと深く学ぶ必要がある。
- ⑤ 論理学はアリストテレスによってはじめて体系化されることとなったが、その思想は「オルガノン（思考の道具）」と呼ばれる『カテゴリー論』、『命題論』、『分析論前書』、『分析論後書』、『トピカ』、『詭弁論駁論』の六つの著作に収められている。
- ⑥ 近代科学の方法論は十五世紀のルネサンスを通してギリシア科学の論証精神とアラビア科学の実験精神との結びつきによって成立したがゆえに、近代科学は論証科学と実験科学との統合によって確立されたと言える。
- ⑦ 自然科学が経験科学である限り、常に「新しい経験」に対して開かれているのは当然であるとしても、自然科学の仮説は修正を免れた絶対的真理の資格を獲得するわけではないため、科学理論や科学法則は永遠に「仮説」の身分にとどまると言える。
- ⑧ ジョン・ハーシエルの後を受け、W・ヒューエルとW・ジェヴォンズは『自然哲学研究に關する予備的考察』において仮説演繹法を今日的な形で明確化した。彼らの唱えた説の本質は帰納法と演繹法の欠陥を補いつつ、演繹のもつ比重をさらに高める点にある。